

スポーツ社会学における記号論的アプローチ ——研究ノート——

社会の〈内なる〉スポーツ（R. D. マーター）を手掛として

山本清洋

本論は論文の内容は備えてなく研究ノートの性格を持つ。従来、構造機能分析的手法によって、「文化—子供—スポーツ」の関連を理論及び調査の両領域で行ってきたが、例えば、〈子供の眼〉から〈文化〉や〈スポーツ〉を把える時の〈子供の眼〉を理論化することで理論的レベル・調査レベルにおいてゆきづまりを覚えた。更に、〈文化〉、〈スポーツ〉を個人のレベルから概念化することも、構造機能分析的手法で一つの限界をみている。そのような彷徨の過程で、記号論の〈文化の中心〉とともに〈文化の周縁〉にも光をあてるという性格がいつも気になっていた。

今回は、記号論の基礎的理論を基にして正面から攻めることでなく、1981年に筑波大学において開催された「見世物と民衆娯楽の人類学」という国際シンポジウムにおいて発表されたロベルト・ダ・マーターの「社会の〈内なる〉スポーツ」^{注1)}を手掛として、スポーツの社会学的分析の新しい可能性を探ってみたい。

方法としては、マーターの分析を逐次追う過程で記号論的分析の可能性を探り、次に「街路の詩学—見せ物芸の記号分析にむけて」^{注2)}他の記号論に関する若干の資料をもとに、マーターの分析の可能性を拡大するという方法をとっている。

1 方法論の理論的基盤

彼は、今日のスポーツの社会学的研究でのスポーツの捉え方は、スポーツを日常の世界と別な存在として位置づけようとする二元論的思考にあると指摘し、この文脈では、概念道具的、機能主義的な考え方が支配的であるために、スポーツは、社会〈のために〉、〈とともに〉、あるいは〈に〉対立して、何かを〈する〉といったように、社会制度に対して、肯定的・否定的、あるいは中立的な道具手段として機能していると考えられていると述べ、このような枠組をブラジル社会の〈フットボールと社会の関係〉に適用した場合に、社会学的分析の明らか

な限界があることを指摘する。

ブラジル社会では、経済が社会の基盤であると思われるのと同じ構造において、フットボールはブラジル社会の「アヘン」と考えられているのである。……つまり、イギリス帝国主義者によって考案され、彼等エリート階級の真似をして習い覚え、輸入されたこの競技（フットボール）は、最も重要な問題から人々の目を逸らさせ、何百人もの国民を騙くらかすために一役買っている。これでは、ブラジル社会は、問題を理解はするが感知しない（つまり、腹は一杯だが、フットボールは好きでなく、カーニバルを毛嫌いする）頭部と、問題を痛感するにもかかわらず、認識しない胴体から成る奇妙な人体のようなものではないだろうか。このような社会状況の下では、他の分野と関連させながら、スポーツ活動がどのように分類されているかを検証する方法が実際に有効であろうと確信している。

以上の問題意識を前提として、記号論的枠組を提示し、具体的な分析を進めている。

1. 社会の中のスポーツ／スポーツの中の社会

現実には、各々の社会は、その社会関係の特有な組み合わせのため、ある特定の制度を〈選び〉、そうすることによって、具体的で、総合的な体系づけられた統一体として、社会の成員の目の前に〈姿を現わす〉ことができる。その中にあって、スポーツは、社会が自身の具体的な姿の顯示を許す媒体であるため、社会と循環的な関係にある。従って、我々が属するような社会制度において、スポーツは日常生活の中では通常隠れているか、かすかにしか感じられない、特定の社会原理を露呈させる媒体の一つと言える。

方法論上の根本的な問題は、対象となっている社会制度におけるスポーツの機能と有用性を明らかにすることではなく、スポーツの社会的分類体系に対するこの新しい視点¹⁾が垣間みせてくれる関係性と²⁾その意味の発見を容易にすることにある。

2. 現代社会におけるスポーツの宇宙

現代社会では、功利主義的価値観が支配的であることから、社会をつくる構成要素として政治、経済に重きが置かれているが、レジャーとかレクリエーションは、その実態がなく、自然発生的なものであり、現在の制度において支配的な功利主義の存在を認めないという事実によって定義づけられている故に軽んじられている。更に、このように功利主義的動因をそれ自体の中に認めない活動は、反一功利主義的性格を備えていることから、それらは統制されておらねばならず、さもなければ、直ちに反国家的、又破壊的なものへと変貌してしまうとされている。

記号論的視点からは、機能性と有用性からなる社会制度の中に、自己完結的で、それ自体固有の価値を保持し、功利主義的思考を排除するスポーツを位置づけることは、現代社会の構造的矛盾を知る上でも、更に特定の社会原理を露呈させる媒体としてスポーツを制度化するうえからも、非常に重要なことになる。図1は、現代社会を支配する規範と価値観が支える経済世界の要因に従って、制度の内外を問わず、すべてのものが相互関連を結んでいるという前提に立ち、スポーツの世界を社会に位置づけたものである。

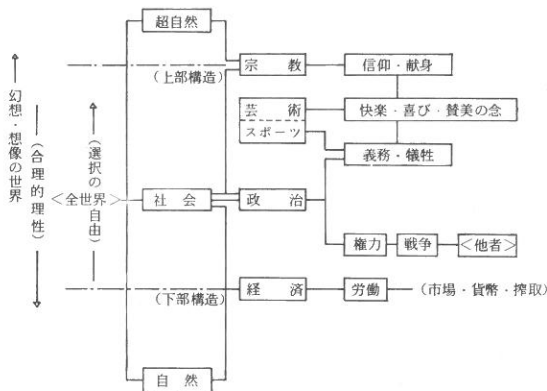


図1 社会のなかのスポーツ

図1の如く位置づけられたスポーツ行為の役割や機能を発見することで、我々は、支配的な功利主義的価値体系からみると存在し得ないはずの合理性がそれらの活動行為に含まれていることを主張し、発き出すことができる。

Ⅱ 具体的な分析過程

1. 異った社会におけるスポーツの位置

ここでは、社会との相互関連下にあるスポーツの意味及び社会における固有の位置を発掘するためにフットボールでの言語使用に視点を当てて分析をすすめている。

素材-(イ)

ブラジルにおけるフットボールという言葉には必ず *jôgo* という修飾語が前につく。事実ブラジルでは、*jôgo* という言葉は用法によって二つの異なる意味を示すのである。アメリカ英語においては、その一方が *jôgo de azar* (偶然性のゲーム) という表現の中で使われ、このコンテキストの *jôgo* は、賭を意味する。他方の意味は、規則に従って競技され、優秀な技術、力あるいは、幸運によって勝敗が決定される、競技という性質がもつ気晴しというスポーツに相当する。アングロ・サクソン系での *jôgo* の意味合いは、競争・技術・力であり偶然性が最少限に押さえられているのに対して、ブラジルでは、スポーツは *jôgo* (賭け) として認知され、その機能を含んでいる。

素材-(ロ)

ブラジルのフットボール競技では、チームは時間と対戦相手だけと戦っているのではなく、運命とも闘っているのだ、と言われている。現在、フットボールには *loteria esportiva* と呼ばれる国営の宝くじ制度が結びついている。この宝くじも実は、運と偶然が支配する価値体系が蔓延しており、その意味からすれば、何百万ドルという賞金が配分されるスポーツ宝くじと共に、フットボール選手による競技上で行なわれるゲームと幸運との巡り合わせを切望して止まないブラジル国民が現実生活の場で繰り広げる類似のゲーム (宝くじ) の両方が展開しているということである。

以上のことから、ブラジルで行われるフットボールはただ単にスポーツとして見做されるだけでなく、完全に異なる価値体系と社会関係を内包する偶然性のゲーム *jôgo* として考察すべきであり、イギリスと合衆国サッカーは集団志向的な文化適応の重要な過程と関連づける必要がある。

フットボールの競技 *jôgo de futebol* もっと適切に言えば、賭け事としてのフットボール (*futebol enquanto jôgo*) は、ブラジル社会が持つデイレンマ (現実社会での全体主義的で個人の意志を越えた運命の力と、敗北と貧困の仮借ない繰り返しからの脱出を希望

する個人の自由意志との間に引き起こされる葛藤)の正に民衆的な演劇化としてこの制度を見直すことになる。

素材-(イ)

次に、ヨーロッパのフットボールからブラジルのフットボールを区別するコンテキストは選手の即興性と個人技の重視である。例えばter (ou não ter) jôgo de cintura, つまり腰でプレイする(しない), あるいは尻をひねる(ひねらない)という表現は、フットボールの中での jôgo de cintura (狡猾さと臨機応変さ)が不可欠な要素であることを示すと同時に、後で盛り返すため、不利な状況を有利なものに変える余地を残しながら、折れずに曲がる事が出来る人間を意味している。

更に、arte da malandragem (だまぐらかしの戦略)は、ブラジルの賢い政治家と優秀なフットボールプレイヤーに要求されている価値であるという事実やフットボールに関する評価が政治に対する評価と同様に fala-se (しゃべる)の対象でなく、discutir (論議)する対象であるという事実は、政治とフットボールが、非常に啓示的な意味合いにおいて対応した世界であることを知らせてくれる。

2. フットボールの演劇化

(1) 人生行路(個人史)と対立する運命の問題

素材-(ニ)

フットボール競技は、普遍的なルール(競技規則)と個人の意志によって無限に多様な状況を生み出す、一定のルールに支配されている一つのエピソードであるから、運命の概念が内在するディレンマは、試合が行なわれるたびに浮かび上がってくる。言い代えると、フットボール競技は、普遍的なルール(競技規則-ある意味では個人の力で統制が非常に困難な存在-)と個人の意志(敵と戦っている選手とチームの欲求)との間に介在する運命の如き相互作用を明確に描き出すものである。勝敗に関係なくその試合の結果は、ブラジル社会の基本的なテーマである運命と個人の人生行路との間に引き起こされる jôgo (賭, 相互作用)のメタファーと見做されるのである。

(2) フットボールの演劇化

素材-(ホ)

1951年の世界フットボール選手権の決定戦で圧倒的に優利と予想された試合をブラジルチームが落とした。

敗北後、ブラジル社会では、絶えまなく destino (運命・宿命・くじ運)と ma-sorte (悪運)について論議が交わされたが、最終的には、運命の力について検証し始め、人種的要因を敗北と結びつけた。そこでは、我々が抱えている不運な人種構成とインディアンや黒人といった劣等な人間集団から成る社会が耐えざるを得ない途方もなく重いお荷物に、このフットボールの敗北原因は直接起因していると言われた。決勝戦に後衛で参加した二人の黒人選手がこの病んでいる劣等国が背負う悲しい定め象徴として挙げられたのである。ウルグアイチームから喫した敗北は、ブラジル社会が常に運命という超人的な力に屈服させられるように、ブラジル国家自体の敗北と見做された。フットボールは、長い間ブラジルが克服したいと願っていた社会問題を浮き彫りにしたのである。

素材-(ヘ)

運命がそのような重大な位置を占めるこの文化的肖像の中からみると、1970年の第三回世界フットボール選手権大会における優勝は<国家的報復>の表現として理解することができる。それはいつも人を「地獄」に突き落とす超人間的な力に対して、社会全体がとうとう勝利を治めたユニークな瞬間であった。世界におけるブラジル国民の位置を再評価してゆく過程と同時に、人種間の再定義がなされ、特に黒人に対して、根本的に積極的な価値が附与されたのである。

素材-(ト)

〔国民による社会の真の変革の根本的要因〕

権力機構の中にいる指導者を通すことによってしか、庶民が何も発言することができない国では、フットボールがスポーツの具現化によって<権力の均一化>を体験する状況を作り出すようである。従って、大衆が国家的シンボル(例えば国旗、国家……)と交わることが許されるのはフットボール(大衆のものでもある)を通して可能になる。そこでは、ブラジルで通常その使用が規制されているすべての神聖な国家的象徴は、社会的・政治的な支配階級の代表者たちの専有物であることを止め、それら象徴とのあけっぴろげで束縛されない親密な関係を祝う無名の大衆たちによって共有されるのである。

素材-(チ)

スポーツ時間の循環性

ゲーム(o jôgo)によって創り出される、管理された、反復的な円環的時間での一時的形態は、個別化した時間(日常の時間)が持つ方向性に隷属することなく

＜静止するし＞、＜変化することなく留まる＞。分節化、個別化した各々の時間の単位は、未来と死に向って常に進行し、本質的に異なったように動いてゆく。それと対照的にスポーツの世界では、各試合が終了する度に、更新し、再生する時間と出合い、あたかも何事も起こらなかったかのごとく、次の試合で同様の経験を全体的に再び味わうことができるのである。

素材-(リ) 自己表出の可能性

伝統的な秩序の痕跡がいまだに残っている社会と同様、ブラジルでも万人が平等であるという姿勢を完全に受け入れるには、多大の困難が付きまとう。特に権力と政治決定権の譲渡に関する法が考慮される場合、それは厳しいものとなる。そのような中で、ブラジルにおいてフットボールが論議の対象となる時、不可侵であり、議論の余地が無い制度として誰もが普遍的な競技規則を受け入れているという注目すべき事実がある。

高度に制度化されているブラジル社会の政治の領域において、人々を互いに結びつける支配の在り方は、成層化された階層的な人間関係のネットワークである。このような社会制度の下では、全ての者の場所は定められており、個人的な変動は許されない。ところが、フットボール、カーニバル、ウムバンダなどの社会領域では、個人の変動はあたりまえのことであり、個人的に傑出しようとする志向は、模範的な態度となる。

素材-(ス) 社会化する仕掛けとしてのフットボール

ブラジル社会の社会的アイデンティティの拠り所は、立憲政治、法律、大学制度、財政的序列などというブラジルの社会秩序の中心的制度ではなく、西欧文明が中心的で支配的な国々において、国民の結束と社会的アイデンティティの生成に、副次的で境界的な意味しかもたないレクリエーション活動（ブラジルのフットボールはその一形態である）が、ここでは、その役を任い、人々を社会化する仕掛けとして、又、社会の本質的な価値（法の前に万人は平等であるという価値と考えてよい）の伝達のための高度に複雑な制度として機能している。

以上が、彼の具体的な分析の象徴的な箇所である。これらの記号論的分析の素材の中でのフットボールという行動は一つの意味システムを形づくっている言語行動であるという前提に立って、「意味するもの」「意味されるもの」に分類して整理したのが、表1（意味システムとしてのフットボール行動）である。

Ⅲ 記号論的アプローチの今後の展開

1. 社会の＜内なる＞スポーツ（ロベルト・ダ・マター）との関連において

山口によれば、「中心」と「周縁」に関する次の説明がある。「政治の世界を統御機構といった面のみに限ることのできる場合に、＜求心的＞と＜遠心的＞といった対比は有効性を持ちうるが政治の象徴的次元に目を移す時、この対比は意味を失う。何故ならば、この対比は観察者のモデルであっても、行為者のモデルではないからである。行為者のモデルとは、彼が属する象徴的宇宙の中での、「＜政治的宇宙＞を意味する」^{注3)}、そして「記号論に不可欠なのは＜中心＞の理念に相反する「周縁」の創出と強調である」^{注4)}。この立場からみれば、例えば構造機能分析の場合、スポーツは上位の社会の機能的要件に対応する形で、その体系を維持している訳だから、＜社会の中心＞に対する、あるいは＜社会の中心＞からみたスポーツの社会学的分析においてはすぐれた業績は期待できても、行為者いわゆるスポーツを行う個人の視点からの分析には、ある限界が予測される。記号論的立場からは、行為者が含まれる＜スポーツの宇宙＞の立場でスポーツ現象を焦点化するので、そこには「中心」とともに「周縁」も同時に内包した形のパラダイム構築の可能性がみえる。

この点に関して言えば、＜スポーツ的宇宙＞を他の制度の中に位置づけたマターの「現代社会でのスポーツの位置」は、スポーツを＜個＞としてみた場合、上述した山口の主張の文脈にあり、前章でみたスポーツの中に社会をみて、その結果より社会を逆照射するという記号論的分析を生かし得る枠組として評価できる。

しかし、更に、その意図が精密かつ鋭角に生かされるためには、他の制度との関連で位置づけされたスポーツを記号論的に構造化する必要がある。具体的には「スポーツが社会的行為として見做される時、規範、関係、目的、身振り、思想などを通した独特のパースペクティブによって、他ならぬその社会自体が自己を表現する媒体としてのスポーツが浮かび上がってくる」^{注5)}という際の、規範・関係・目的・身振り・思想等々を、フットボールを言語行動として把える中にまき込んで、コード、メッセージ、コンテキストの構造化を計ることであろう。この点、中沢が見せ物をコード編成とコード解読の過程を含むコミュニケーション行動として把え、見せ物芸の構造を図2（見せ物芸の構成要素）^{注6)}のように示しているが、言語行動としてのスポーツの構造化には大いに参考になる。マターの本論における分析が、意味システム

表1 意味システムとしてのフットボール行動

1. 異った社会におけるスポーツの位置（シンボリズムに焦点をあてる場合）

素材	記号	意味するもの	意味されるもの
イ	1. ブラジルのフットボールには必ず jôgo という言葉がつく。jôgo de azar	賭・運のゲーム 賭ごととしてのゲーム	偶然性を支持する社会価値の存在
ロ	2. フットボールと loteria esportiva(国営の宝くじ制度)の結びつき		現実社会での全体主義的で個人の力をこえた運命の力と敗北と貧困への仮借ないくりかえしから脱出を希望する個人の自由意志との間に引き起こされる葛藤の規範
ハ	3. futebol enquanto jôgo jogo de cintura(腰でプレイをする) arte da malandragem (だまくらかしの戦略) 縦横術	賭け事としてのフットボール ・狡猾さと臨機応変さ、即興性 ・不運な状況を幸運なものへと変容させることができるプレイ ・政治的にも社会的にも成功者であるための条件	ヘテロジニアス（異種の、異質の）な社会が抱かえる諸制度の存在

2. フットボールの演劇化（パフォーマンスに焦点をあてる場合）

ニ	普遍的なルールの下でのプレイの支持	・試合の結果が、運命と個人の人生行路との間に引き起こされる jôgo のメタファという考え方	運命と人智との対立が内包される社会制度の存在
ホ	圧倒的に優位を予想された1951年フットボールワールドカップ決勝戦でのウルガイへの敗北	・異なる人種が存在（チームメンバー、社会）が敗北の原因である。	ブラジル社会が長年の間かかえている人種問題の解決という課題
ヘ	1970年フットボールワールドカップでの優勝、そこでのペレ（黒人選手）の活躍	・否定的で劣性と思われていた己の運命に打ち勝った報復の儀式 ・運命という超人的な力に対し、社会全体が勝利を治めた儀式	ベテロジニアスな社会（特に黒人へ）の再定義の必要性
ヘ	国家的シンボルの共有（国旗、シャツ）	・権力の均一化の体験	経済的政治的支配階級による国家的象徴の独占 自らの欲求の発言の場をもたない社会に真の変革をもたらす根源的エネルギーの可能性
ト	繰り返えられるスポーツの試合〔スポーツ時間の循環性〕	因果律な概念の宙吊り	現実社会の時間が本質的に歴史的であること
チ	普遍的な競技規則を受容したプレイ	個人的に傑出しようとする志向への評価 万人は平等であるという価値	権力、政治決定権が一部支配層に集中している社会構造の存在
リ	フットボールでの社会の一体化	ヘテロジニアスな社会におけるアイデンティティ生成	

注 素材の記号〔イ、ロ、……、ル〕は本文の記号と同じである。

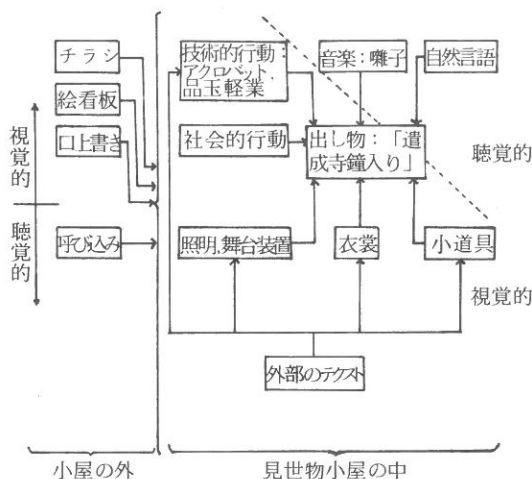


図2 見世物貰の構成要素

注) 外部のテキストの物語構造はアクトバット・シークエンスも規定している。この芸の場合、虚構性、幻想性を強調するため、社会的行動は極力おさえられている。

としてのフットボールを扱う場合、終始用語のみを分析の用具にしていることは、一つの視点から深い分析をなすことには成功しているが、他面、フットボールが持つ多くの記号的側面を見逃し、多様な＜社会の中のスポーツ／スポーツの中のスポーツ＞の分析に至っていないという欠点を持っている。その意味でも、スポーツの記号論的構造化が必要である。

次に、分析方法として演劇化の概念を持ち込み、「演劇化特有の性質は、日常生活、あるいは＜実生活＞のルーティンから明確に摘出されることのない関係性、価値、思想などに注意を向けさせることにあり」注7)「演劇の形態としてフットボール及びスポーツ一般を研究することによって、社会がその成員に真の姿を認知するように促す特殊な社会形態としてこれらの活動を分析する」注8)と述べている。実際、表1にみられるように、スポーツの記号の中から、ブラジルのヘテロニアス社会を照射することに、かなりのレベルまで成功している。従来の研究におけるスポーツが社会の従属変数的性格を抜け出せなかった点を、共変変数関係の地位まで高め、更に「社会の＜内なる＞スポーツ」として、社会を逆照射する分析の媒介項になした貢献は大きい。

今後は、「世界把握のモデルとして演劇を形づくっているのは、基本的にいって、何よりも＜シンボリズム＞であり、＜コスモロジー＞であり、＜パフォーマンス＞であろう」注9) という中村の概念を参考にして、各々に対応する理論的な内容を、スポーツという現実の宇宙に身を呈することからつくりあげることが必要となる。その際に、「シンボリズムとコスモロジーとパフォーマンスは、イメージ豊かな多義的な世界のなかで深層のリアリティを開示する不可決な要件である。シンボリズムは、現実的なものと想像的なものとを結びつけるとともに、多義的なイメージの産出の母胎であり、人間と人間、人間と世界とが有意味的に出会うところである。シンボリズムのうちもっとも根源的で強力なものは聖なるものであり、それが中心になって世界は方向づけられ、分節化され、象徴的に創造される。そして実は、このような世界がコスモロジカルなものとしてあらわれるためには、人間の方も世界と生き生きとして交流するパフォーマンスの主体、つまりパトス的な劇的行動者でなければならない」注10) という＜シンボリズム＞、＜コスモロジー＞、＜パフォーマンス＞の意味と関連を十分に留意することが必要となる。具体的にスポーツのパフォーマンスを考える場合には、中沢の「大道芸テキストの修辭的構成」注11) は大いに参考になると思われる。

同 型 的 な 芸 の 反 復	(1) 手巾を捻って 蛇をつくる芸	品物(オブジェ)の 変形による文化カテ ゴリーの変形	社 会 ・ 文 化 的 レ ヴェ ル
	(2) 狐の尾を操つ る芸	換喰の操作による文 化カテゴリーの変形	
	(3) 鉄輪はずしの 芸	最小限の労働で品物 を一気に変形する	
媒 介 的 な 芸 の 反 復	(i) 大釘の芸	肉体的危機のコント ロール	生 物 ・ 物 理 的 レ ヴェ ル
	(ii) 舌刀の芸		
	(A) 籠抜けの芸		
増 修 大 辞 率 的 な 配 列 の 攪 乱	はぐらかしによる緊張の一時的解消一笑い (テキストの転調)		
	(I) 普通の籠抜け		
	(II) ロウソクをともした籠抜け		
	(III) 刀を突き通した籠抜け		

図3 大道芸テキストの修辭的構成

脚注，引用文献

- 1) Roberte Da Matta 社会の＜内なる＞スポーツ／国民劇，国民祭としてのフットボール 「見せ物の人類学」 山口昌男，Victor Turner〔編〕，三省堂，1983.
- 2) 中沢新一 街路の詩学－見せ物芸の記号分析にむけて－ 「思想」10月号，岩波書店，1977.
- 3), 4) 山口昌男，文化と両義性，P 222. 岩波書店，1980.
- 5) Roberto Da Matta 上掲書 P 254
- 6) 中沢新一 上掲書 P 126
- 7), 8) Roberto Da Matta 上掲書 P 253
- 9) 中村雄二郎 魔女ランダ考－演劇的知とは何か，P 120. 岩波書店 1983.
- 10) 中村雄二郎 上掲書 P 131
- 11) 中沢新一 上掲書 P 135

参考文献

1. 構造主義と記号論 Terence Hawkes 著 池上嘉彦訳 紀伊国屋書店，1979.
2. P. Guiraud 著，佐藤信夫訳 記号学－意味作用とコミュニケーション－ 白水社 1972.
3. 中村雄二郎 共通感覚論－知の組みかえのために－ 岩波現代新書 1979.
4. 佐藤信夫 記号人間－伝達の技術－ 大修館書店 1977.
5. 日本記号学会編，記号学研究Ⅰ・パフォーマンス，記号，行為表現，北斗出版 1982.

昭和59年3月30日受理